

## 未来ノート

-202Xの君へ-

## 柔道

あさ ひ な さ ら

## 朝比奈沙羅

大地をつかむ足

父の4点セット

貫く二刀流の夢

笑顔でいるわけ

## 運命的 自宅近くに講道館

柔道女子78kg超級の世界女王、朝比奈沙羅(22)はパーク24は自分の大きな足が好きじゃなかった。幼稚園のころ、ぴったり入ったのは23・5kgの母の靴。同級生の子どもの用のかわいい靴がうらやましかった。

しかし、この立派な足が柔道を好きになるきっかけをつくってくれた。

小学2年の夏だった。自宅のテレビにアテネ五輪の

中継が流れていた。男子100kg超級、髪を短く刈り込んだ鈴木桂治が躍動していた。「かっこいい」。最初はソファにもたれかかっで見えていたが、気がつくとも床に正座するほど魅了されていた。「柔道がやりた」と父にせがんだ。

自宅の近くに柔道の総本山、講道館があったのは運命的だった。その講道館で活動する「春日柔道クラ

ブー」を見学すると、監督の向井幹博さん(56)に声をかけられた。「君は、大地をつかむいい足をしているね」。そんな風に足をほめてもらうのは初めてだった。やる気になった。「柔道は自分に向いているのかも。がんばってみよう」

向井さんは「上半身が大きくても足が小さい子は多い。でも、彼女はアスリート」の足をしていました」と振り返る。ただ、最初は自分より小さな子にも投げられてばかり。大きな体を投

げ飛ばすのを面白がられ、「沙羅ちゃんやろう」と皆が群がってきた。

試合に出ても負けてよく泣いた。それでも、週6日の練習は楽しんで通い、力をつけた。クラブの2学年上にはリオデジャネイロ五輪男子90kg級金メダリストになるベイカー・栗秋、1学年上には男子100kg級で2017年世界王者に輝くウルフ・アロンがいた。

のちに世界で活躍する仲間たちとの切磋琢磨。小学5年になると団体戦の大将を任せられ、副将のウルフとともに戦ったことも。「いつか、オリンピックで金メダルをとる」。五輪がどんな大会かもよくわかっていなかった。でも、そんな漠然とした自信が早くも芽生え始めていた。(波戸健二)



①世界選手権で試合に臨む朝比奈沙羅=2017年

②5歳のころ。柔道を始める前からピアノやそろばん、水泳などの習い事をしてきた=家族提供

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。